学 位 論 文 審 査 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	糟谷　里美 【比較社会文化学専攻　平成２１年度生】	従来の小牧に対する評価は、戦後上海から帰国した戦後の小牧の活動のみに基づくものであり、小牧がなぜ戦後日本のバレエのパイオニアたりえたか、その源への言及がみられない。それに対し、本論文では小牧が居留したハルビン及び上海において、舞踊家小牧の出発点となったハルビン音楽バレエ学校での学びと上海バレエ・ルッスでの活躍に関する当時の現地新聞記事や公演プログラム等を収集、また、戦後の新聞雑誌記事、小牧執筆による著作や寄稿文等を入手して、戦前の活動を丹念に辿ることで、小牧の再評価を試みている。その結果、小牧の日本バレエの発展への貢献の源は、ディアギレフの「バレエ・ルッス」の日本への本格的導入にあるとし、小牧が「民族の超越」「民族への回帰」を活動の根源に置き、日本の風土に馴染ませながらバレエの定着に力を尽くし、日本バレエを発展に導いた点に、日本バレエのパイオニアとしての小牧を再評価している。 本論文に対する審査は査読に基づいて二回行われ、第一回審査会では、小牧のハルビン・上海での活動に関する資料を現地で掘り起こした貴重な一次資料による質の高い論文であり、目的も明確で章立ても無理のない構成であると評価された。しかし、本論文の中核となる「民族の超越」については戦後の活動を規定していくのでキャトコフスカヤの言葉の解釈を正確に行なうこと、従来の小牧の学術的評価に補足説明が必要であることの指摘がなされた。第二回審査会では、以上の指摘に対し適切且つ妥当な加筆修正が施されていることを確認し、論文の完成度が高まったと評価された。 公開発表、それに引き続いて行われた最終試験における質疑応答においても、真摯な姿勢での満足すべき応答が得られ、研究に対する理解力と学力が十分であるものと判定された。 以上の結果、本論文は博士論文としての到達点に達していると評価され、本審査委員会は全員一致で、学位申請者糟谷里美が最終試験に合格し、人間文化創成科学研究科の学位、博士（学術：Ph.D. in Dance Studies）として認定するに値すると判定した。
論 文 題 目	バレエ振付演出家　小牧正英（1911-2006）研究 ―バレエ・ルッスの日本への導入をめぐって―	
審 査 委 員	（主査）　教　授　　柴　　眞理子	
	教　授　　秋　山　光　文	
	教　授　　猪　崎　弥　生	
	准教授　　神　田　由　築	
	准教授　　水　村　真由美	
インターネット公表	○　学位論文の全文公表の可否（　可　・　否　） ○　「否」の場合の理由 ア．当該論文に立体形状による表現を含む イ．著作権や個人情報に係る制約がある ウ．出版刊行されている、もしくは予定されている エ．学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている オ．特許の申請がある、もしくは予定されている ※　本学学位規則第２４条第４項に基づく学位論文全文のインターネット公表について	